

親の学習活動とその子の行動

—尼崎市を事例として—

井 上 豊 久

(教科)

(平成5年9月10日受理)

はじめに

従来、我が国の社会教育研究の分野において成人の学習活動の研究は数多く見られ、親の行動の研究も少なくなかった。しかしながら、親の行動の中でも学習に焦点をあてたものはあまり多くない。さらに、親の子どもの養育態度と子ども行動等の研究は『母親の養育態度・行動と子どもの知的発達』(東洋他著, 1980年, 東京大学出版会), 『親子関係と情緒』(昌子武司, 1990年, 教育出版)等に見られるように比較的研究されてきたが、しつけ等、家庭教育に関するものではなく、親の学習活動とその子どもの行動に研究対象を絞ったものはほとんどみられない。しかしながら、社会教育の分野において、子どもの学習環境を立体的にとらえようとする際、従来のような所得や学歴等を環境要因と捉えるだけでなく、親の学習活動を環境要因の一つとして検討することは、所得や学歴の影響を子どもは受けてしまうので、環境は変えられない、とする隘路を打開する一つの指標となるのではなからうか。このことは、垂直的・水平的統合という生涯教育の観点からも研究成果が待たれている。

そこで本研究では、1988年12月から1989年2月にかけて、論者も共同で調査に加わった「都市環境と青少年(尼崎市)」¹⁾という尼崎市を事例として実施した調査結果の分析を中心に親の学習活動とその子の行動に関して検討する。その際、まず、親の学習活動を分析し、次に親の学習活動が子どもの行動にどう影響するのかを考察する。

1. 親の学習活動のとらえかた

今回の調査の対象は、小・中学生の親とその子である。したがって、学習の層として考えると、親の場合、成人全体のバランスからすると、若年

層と高齢者層が、比較的少ない。調査対象の特徴としてあらかじめ押さえておく必要があるのだが、今回の調査の場合、アンケートに答えやすい親に回答を頼んだため、父親が13.5%、母親が86.5%と母親(女性)が圧倒的に多い。一般的に30代後半から40代が多いこの年齢層では、父親の場合、いわゆる「働き盛り」と言われ、また、母親では、最近ではこの年齢層の母親は家での子育てを終え、常勤、パートタイムでの仕事についている人がかなり多く(約74%)、相対的に他の層に比べて自由時間の少ない人々が多いのがその特徴と言える。しかし、調査結果を分析する場合、ある程度年齢層が限られているとはいえ、多様な成人を対象としてその学習活動をとらえようとする社会教育の場合、フォーマルを基調とする学校教育と同じ観点からとらえることが適切でないことはいまでもない。なぜなら成人の学習活動は基本的に本人の自主性に任されたものであるために、学習活動を展開している親本人にとっても不明確なこともあり、学校教育のようにあらかじめ確定した内容や方法や形態があまりないからである。そのため、成人である親の学習活動の現状を質問紙を通じて正確に把握することはけっして容易な事ではない。例えば、ある経験が学習活動であるかどうかは質問のあり方によって左右されるし、学習経験の時期をどこまでさかのぼるかによって、経験者の割合はかなり異なってくるのである。

今回の調査では、以上のことをふまえた上で、親の学習活動の把握においては、1982年に尼崎市で成人全般に対して学習活動について質問して行った前回の調査「1983生涯教育に関する基本調査 尼崎市」(以下「前回の調査」と略す)と同様の質問形式を採用した。具体的には、まず「これまで、あなたは次にあげたような方法で学んだことはありますか。あるものすべてに○をつけ、」内に学習の内容を書いてください」と質問し、以下13の学習方法を列挙し、さらに「上に

あげた学習の中で過去1年間に学んだものがありますか。あればその番号を次を書いてください」という質問を付け加えたものである²⁾。今日の生涯学習のとらえかたからすると、「学んだ」という学習者である親の学習意図が明確なものみに回答してもらったため、本人の学習意志を尊重した学習のとらえかたであり、多少限定的な学習経験のとらえかたである、とも言える。

以下の報告では、学習を経験した人の割合を「学習経験率」という指標で表すが、この「学習経験率」を算出する際の母集団には「無回答」が含まれている。即ち、回答していない人はすべて学習経験無しとみなした。質問の方法によりそうせざるをえなかったのであるが、もしも、回答そのものを拒否した人を除外する事ができれば、学

習経験率はさらに高くなるはずであり、それゆえ以下述べる学習経験率は、学習活動を経験したことがある人の最低限の比率である。

こうした学習活動のとらえかたで、尼崎市の親の学習経験を具体的にみていくと、調査結果としては、全体としては、尼崎市の小・中学生の親全体(N=2777)の「これまで」の学習経験率(学校教育は除く)は、56.4%であり、「過去1年間」の学習経験率は、20.7%であった。

2. 学習方法から見た親の学習活動

学習経験を学習方法別にみると、図1のようになる。まず、「これまで」の学習経験率の高い順に見ていく。最も学習経験率が高いのは「身近

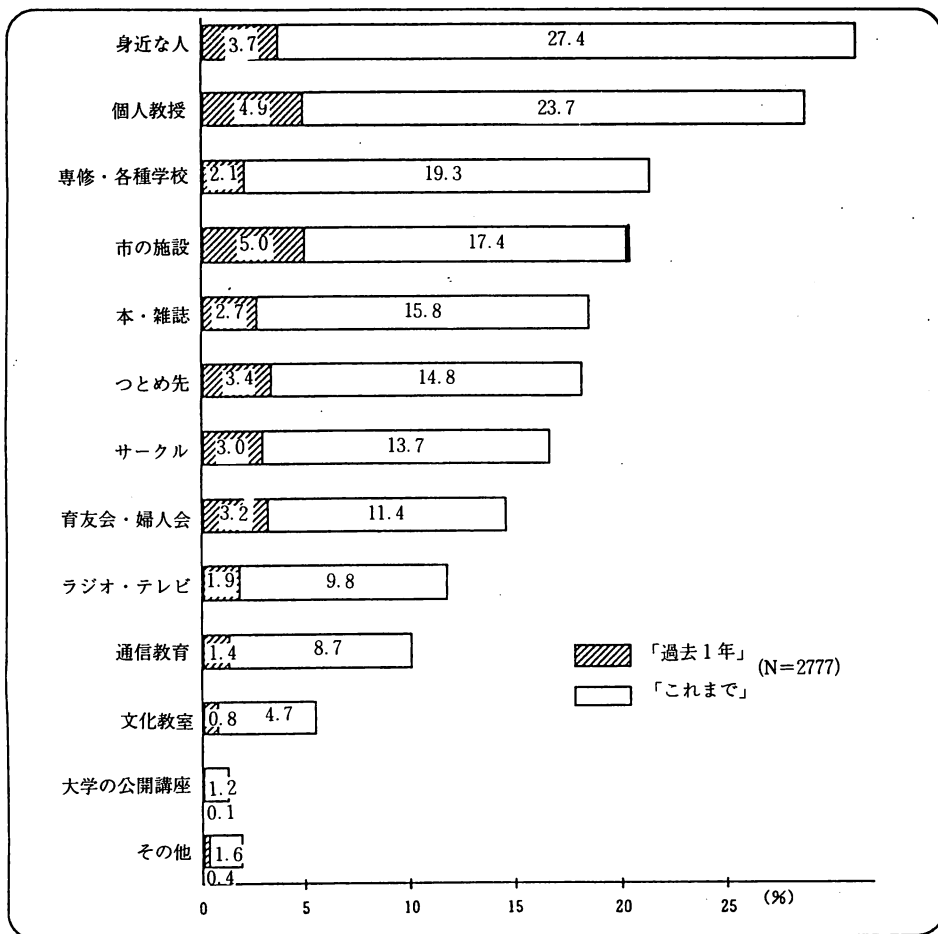


図1 方法別学習経験率

なひと（家族・友人・近所のひとなど）に教えてもらった」（以下「身近なひと」と略す）の27%である。親の4人に1人が「身近な人」によって学んだ経験がある。この方法は、生涯教育・生涯学習とよばれる分野では、これまであまり注目されることのなかった学習方法であるが、「ラジオやテレビを利用して学んだ」（以下「ラジオ・テレビ」と略す）、「本や雑誌などで自分で学んだ」（以下「本・雑誌」と略す）と同様、学歴差や所得差による学習経験率の違いが比較的少ない方法であり、ある意味では誰もが学びやすい気軽な方法である。今後は、このような方法の援助・促進のために、情報提供・学習相談を中軸としたサービスがネットワーク化の進展と共に早急に求められる。

学習方法としての「身近なひと」に続くのは、「先生やお師匠さんから個人教授を受けた」（以下「個人教授」と略す）の24%である。これは、少人数で人間的触れあいを深めながら学ぶ方法といえる。ここ1年でも「市の施設」5.0%について多く（4.9%）、親（特に母親）にとって親しまれている（父親はここ1年では1.1%）。

また、一般成人を対象とした全国調査『日本人の学習』（NHK放送文化研究所、1990年、第一法規）と比較すると、「育友会や婦人会などの教室や講座に通った」（以下「育友会・婦人会」と略す）が、断然多く、『日本人の学習』の全国平均と比較しても「前回の調査」から引き続いて尼崎市で盛んである。それと同時に、具体的な自由記述をみると教育に関する内容もかなりあり、親であるため参加している部分も多分にある。また、その『日本人の学習』で比較すると「文化教室（カルチャーセンター）」の利用が少ないのも特徴である。このことは、自由時間が比較的少ないこともあるが、所得との関連をみると、一般成人の場合、所得の上昇によってカルチャーセンター利用が増えるという傾向の中、費用が相対的にかかるカルチャーセンターで同じくらいの所得であっても親の利用率が低いのは、「教育費用を税金から引いて下さい」という自由記述にもみられるように、自分の子の教育費の増大による家計への配慮があるようである。

3. 学習内容から見た親の学習活動

前節では、学習方法の観点から親の学習活動を分析した。本節では、学習内容から見た親の学習活動を明らかにし、親の学習活動の構造をより詳

細にみていく。

図2は、学習内容を大分類して方法別にその構成を示したものである。また表1は、この大分類に含まれる内容を具体的に記入したものである。今回の調査では「前回の調査」で「社会問題」の中に含まれていた「その他」を今回は七番目の分類項目として別に新しく設定した。つまり、「社会問題」という内容分類項目をより明確にし、「社会」として前述の「日本人の学習」にも対応させる形式にした。図2にみられるように、学習方法によって学習内容がかなり異なっている。図の上から順に見ていくと、「身近なひと」では「趣味」が43%、「家庭生活」が28%、「教養」が22%、となっており、その中身を見ても日常生活にかかわりの深い手芸や被服、道德といったものが多い。「個人教授」では「趣味」が73%である。さらに詳細にみると、母親が調査対象のかなりの部分を占めていることもあり、「趣味」の中でも茶華道が約半数を占めており、伝統的な内容の根強さがうかがえる。集団学習の形態をとる「サークル」では、「スポーツ」が19%と他の方法に比べ多いのが特徴であるが、「社会」も11%と多い。この「社会」の中にはボランティア活動等が含まれている。「サークル」では、職場「サークル」数の減少もあろうが、専門性の向上が求められる急激な技術革新の時代の流れとも相まって、より体系的な学習方法によって学習されているのか、「職業」に関する内容が前回（21%）に比べかなり割合が低くなっている（6%）。また、女性が男性に比べ「サークル」活動をする割合が、高くなっていることも現代の見逃せない特徴であろう。このことは、実は、育児に専念をせざるを得なくなっている女性への援助方策の必要も示しているように思われるゆえんである。

「通信教育」では、簿記、校正など「職業」につながるものが35%と多い。「ラジオ・テレビ」では、「教養」（そのほとんどを語学が占める）が41%と多い。今回の調査対象である親が多感な青少年と関わる子育ての時期にあるためか、家庭生活にかかわる内容（その多くは家庭教育である）が、一般成人を対象とした「前回の調査」（26%）に比べ多い（36%）。「本・雑誌」は、個人学習の形態であるため「スポーツ」は少ないが、他は一般成人を対象とした「前回の調査」と同様内容は多様であり、時間や費用に制約のかかりやすい親にとって重要な学習方法であると言うことがうかがわれる。孤独な学習活動であるため、学習を中断することも多く、チューター制やスクーリング

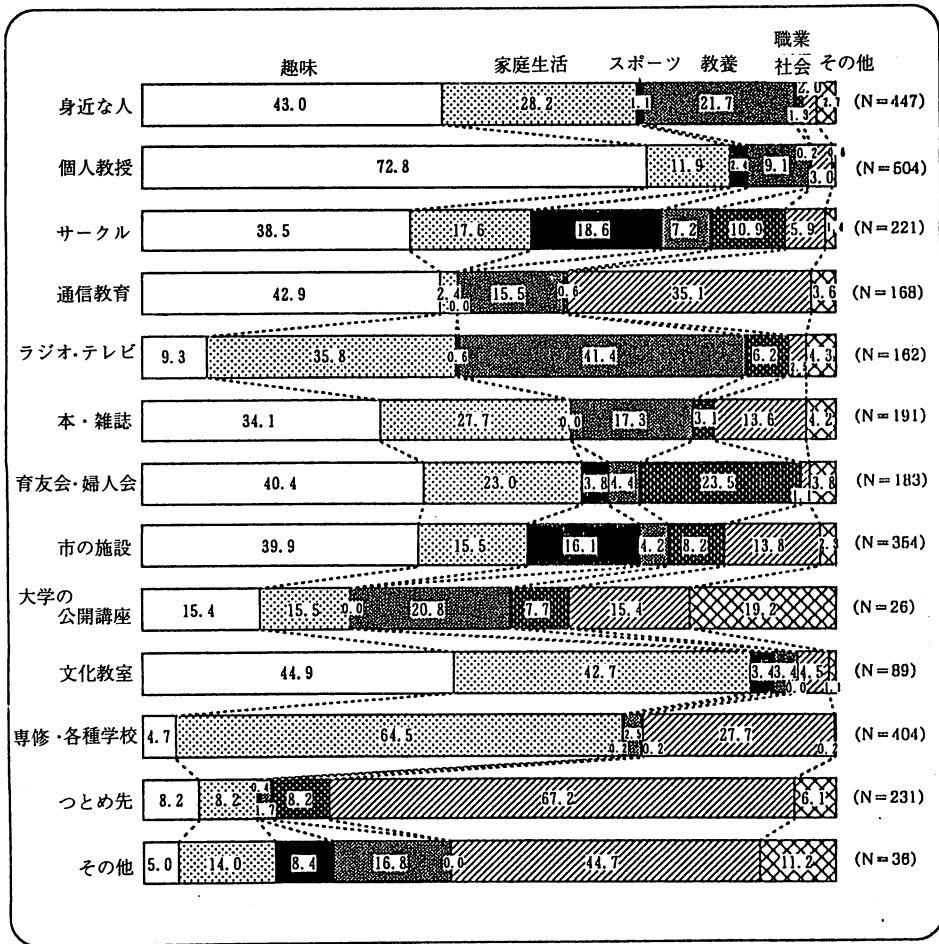


図2 方法別にみた学習内容

の活用を含め、どう動機付け、継続を支援するかが今後さらに研究されるべきであろう。「育友会・婦人会」と「市の施設」は同様の傾向を示している。即ち、「趣味」が双方ともに40%を占め、他に比べ「社会」に関する内容の占める割合が高い。高等教育の内容を集会の形態で提供する「大学の公開講座」は、他に比べ「教養」(31%)と「社会問題」(8%)が多い。比較的高額で立地条件の良い場所で行われている「文化教室」(カルチャーセンター)では、「趣味」(45%)の他に「家庭生活」が43%を占めており、「日本人の学習」で調査された一般成人に比べ、「家庭生活」の割合が高く、「子どものことを理解したいから来ています」という具体的な自由記述に見られるように子どもの教育への関心の高さがうかがわれ

る。しかし、別の見方をすれば、家庭や教育といった内容に対しても核家族とも関連してか、家や地域以外の場所で組織立った教育を利用する現代の親の傾向がうかがえる。

「専修・各種学校」では、「家庭生活」が65%と多い。これは、今回の調査対象の87%を母親が占め、学習内容の大部分は料理である。このことは先述の「文化教室」の内容とも関連するが、親や姑から学ぶということが少なくなった事とも関連している事と思われる。次に、「職業」も「専修・各種学校」では28%と多く、経理を覚えたり、保母の資格をとったりという内容が具体的には多くなっている。また、全体的傾向として「専修・各種学校」では、「前回の調査」結果に比べ、趣味や教養といった内容の割合が減少しており、実

表1 学習内容分類表

趣 味	手芸（刺しゅう・手編）工芸（ペーパークラフト・木工・レザークラフト・アートフラワー）陶芸（七宝・やきもの）園芸（盆栽）茶道 華道 器楽 合唱（コーラス・フォークソング・声楽）ダンス（舞踊・ジャズダンス）詩吟 謡曲 能楽 民謡 美術 書道 ゲーム オーディオ・無線 演芸 彫刻 版画 組ひも
家 庭 生 活	料理 カクテル 被服 美容 冠婚葬祭 話し方 人間関係 礼儀作法 育児 家庭教育 健康 救急 和裁 洋裁
ス ポ ー ツ	球技（テニス・ゴルフなど）体操・トレーニング 水泳 格闘技（柔道・剣道など）野外活動（ハイキング・登山など）その他のスポーツ（つり・スキー）
教 養	英語・英会話 その他の語学 文学 詩歌 俳句 和歌 短歌 川柳 児童文学 地理 歴史 民族 尼崎の歴史 考古学 思想 宗教 人生観 哲学 数学 統計 読書 婦人・女性講座 心理学 道徳 科学 漢字検定
社 会	ボランティア活動 大学教育 同和問題 人権問題 婦人問題 女性の自立 老人問題 障害者問題 地域の環境問題 公害 時事・世界問題 教育問題・育友会 海外の教育
職 業	法律 経済 工学 化学 経理・簿記 英和文タイプ テレックス ワードプロセッサ コンピューター 工業技術 建築 校正 トレース デザイン レタリング 運転免許 リーダー訓練 営業 販売 労務管理 QC 保健 教職 保母などの資格 医療事務 計算尺
そ の 他	専門 一般（分類不能なもの）

用的な内容へと向かう傾向が示された。社会の動きとも対応して親も子育て後の再就職の準備をしていると言える。しかしながらその一方で、「つとめ先」では、当然のことながら職業関係が内容として多いにもかかわらず、その「職業」に関する内容の占める割合は「前回の調査」の79%に対し、今回は67%で12%も低下しており、「趣味」、「家庭生活」、「社会」の割合が増大している。これは、親である、あるいは母親が多いという理由よりも、従来のように「つとめ先」での学習活動が職場の仕事に直結する内容に限定しない、という最近の企業内教育の傾向を示していると言える。具体的には、アンケートにもみられた退職前の職員を対象とする年金講座の開設などが、生涯学習の観点に立った新しい学習内容の典型の一つである。

以上、親の学習内容を内容別と方法別の双方から見てきた。これらの調査結果の分析から、小学生・中学生の親に対してどのような機関が、どのような方法・形態を利用して、どのような内容を提供しているのかということがかなり明確となった。概して言えば、小・中学生の親は時間的・金銭的に多少制約を受けがちであり、内容的には、他の一般成人に比べ確かに家庭教育等が多少多く

なるとは言え、やはり、人生の充実のためいくつかの内容・方法を多様にそして重複して活動している実態がいま見られた。このような幅広い内容領域にわたって、多様な方法・形態で行われている学習活動に対し、行政がすべての責任をおったり、すべてに対して援助したりすることは困難である。行政としては、基本的には条件整備による機会の提供を参加者の立場にたってすすめる他はないのだが、青少年の学校外活動の充実を考える場合、自然体験・直接体験に対する親自身の学習活動を活性化する方法が今後は望まれるところである。自由記述をみても、実際に活動できるそのような場が減少してきており、行政には、特に条件整備の充実が要求される。長期的展望にたって各々の機関や団体が「いつでも、どこでも、だれでも、なんでも」学習できる生涯学習社会の一端を担い、学習者の視点に立って、果たすべき役割を明確化することが、生涯教育の拡充のためには是非とも必要である。その鍵は、社会教育関連事業の連携にあることもサービスという観点から今後は是非とも必要となろう。

4. 子どもの行動に及ぼす親の学習活動の影響

前節までは、主として親の学習活動の現状について見てきた。本節では、子どもの環境の一つとも考えられる親の学習活動が、はたして子どもの行動に影響を及ぼすことがあるのか、あるとしたら親の学習活動が子どもの行動にどのような影響を及ぼすのかについての分析を試みる。

図3から図8は、先述した13の学習方法のうちひとつでも「過去1年間に学んだものが」ある親とない親にわけ、学習活動の有無で、所得別、学歴別に小・中学生が「ふだんの日、少しでも本を読むか」「ふだんの日、少しでも家で勉強するか」「学校での勉強がよくわかるか」といった3つの項目について各々図示したものである。各図の全体の棒の長さを比べればわかるように、所得別、学歴別ともに全般的にいえることは、子どもの行動に関しては、どの項目をとっても親の学習経験はプラスに働いている。

図3は、所得別に親が過去1年間に学習した経験があるか否かで、子どもがふだんの日にすこしでも本を読む割合を図示したものである。読書は、

子どもの学力の基礎となるものの一つであり、「少しでも」という限定をかけたことにより、子どもの意欲を測る一つの指標として、この項目を分析に加えた。全体では8%ほど学習経験のある親の子どものほうが、学習経験の無い親の子の本を読む割合よりも高いのであるが、詳しく見ると所得によってははっきりとした違いが現れている。即ち、低所得になればなるほど親に学習経験がある子どもが本を読む割合は増え、子どもの本を読まない比率との差が大きくなる。ただし、理由は明確ではないが、逆に700万円以上では、親に過去1年間の学習経験がある場合のほうが、ない場合に比べ、僅かではあるが、子どもの本を読む割合が少なくなっている。次に図4は、学歴別に親が過去1年間に学習経験があるかないかで、「子どもがふだんの日に本を少しでも読む」割合を図示したものである。短大・大卒の親では、親の学習経験の有無によって、子どもが本を読む割合の差は7%だが、中卒の親とその子では14%と2倍になっており、この面での親の影響力の大きさをうかがわれる。

図5と図6は、それぞれ所得別と学歴別で親が過去1年間に学習経験があるか無いかで、「子どもがふだんの日に少しでも家で勉強をしている」

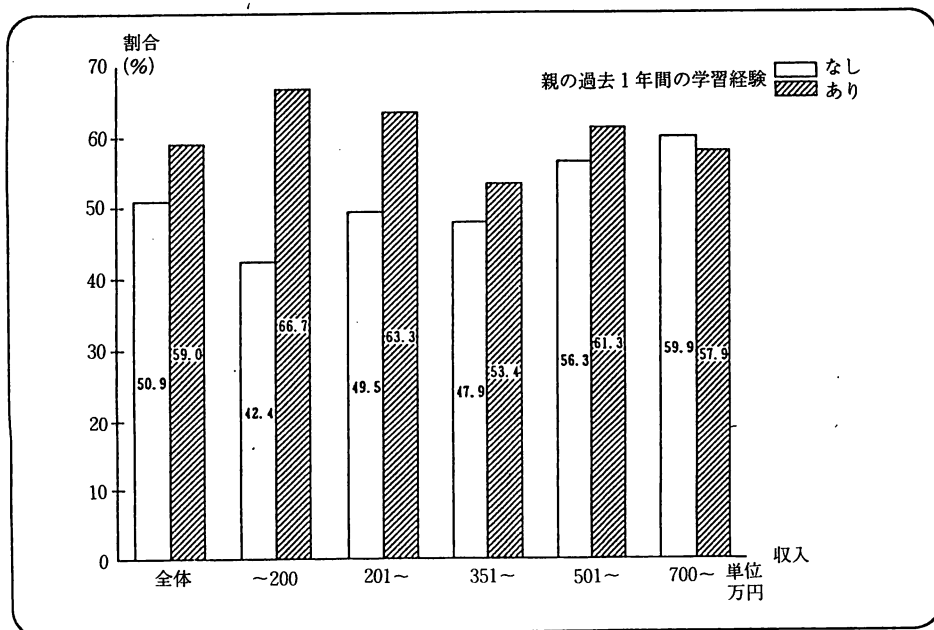


図3 親の過去1年間学習経験の有無による、子どもが本をふだんの日少しでも読む割合（所得別）

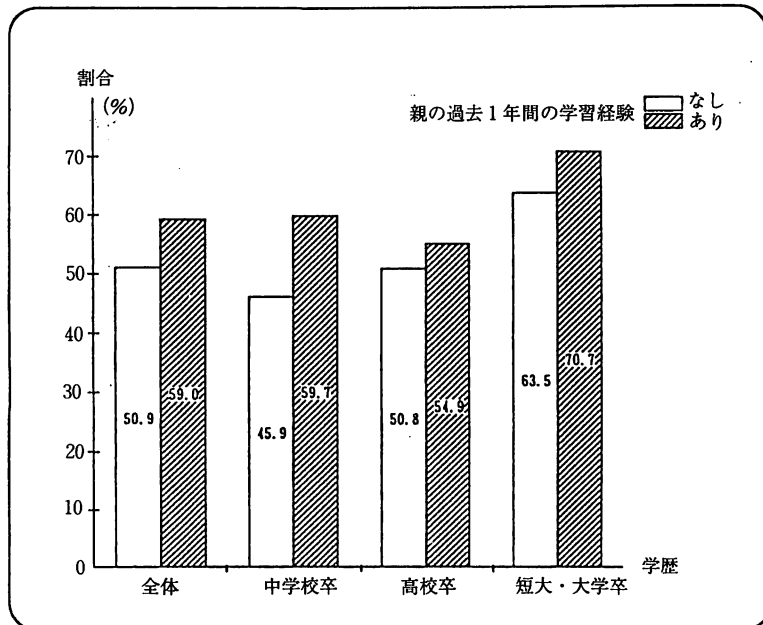


図4 親の過去1年間学習経験の有無による、
子どもが本をふだんの日少しでも読む割合（学歴別）

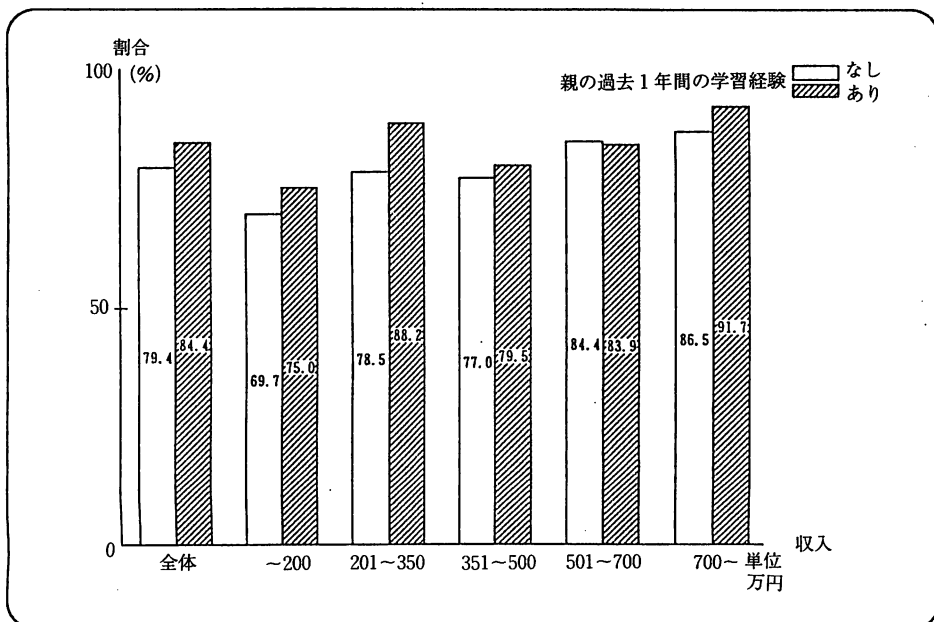


図5 親の過去1年間学習経験の有無による、
子どもがふだんの日少しでも勉強する割合（所得別）

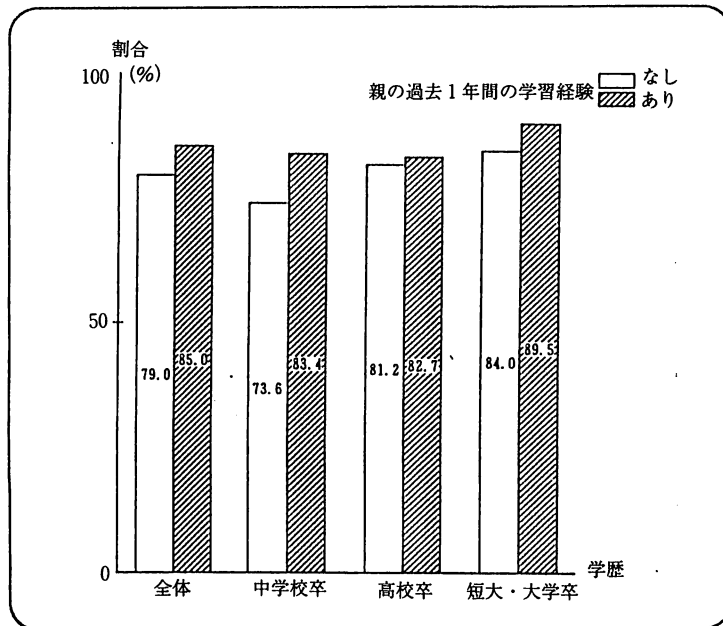


図6 親の過去1年間学習経験の有無による、
子どもがふだんの日少しでも勉強する割合（学歴別）

割合を図示したものである。全体では5%ほど学習経験のある親の子どものほうが「家で少しでも勉強する」割合が高い。本を読む割合ほどではないにせよ、ここでも低所得、低学歴の親の子ほど、過去1年間に親に学習経験があると、子どもの家で勉強する割合が高いことがわかる。

最後に図7と図8は、それぞれ所得別と学歴別に親が過去1年間に学習経験があるか無いかで、子どもが「学校での勉強がよくわかる」割合（子どもの自己評価）を図示したものである。全体では7%ほど学習経験のある親の子どものほうが、「学校での勉強がよくわかる」と答えた割合が高い。しかし、ここでは高所得、高学歴の親を持つ子どものほうがプラスに働くようである。例えば、親の所得が201万円から350万円では5%ほど学習経験のある保護者の子どものほうが「学校での勉強がよくわかる」割合が高いのに対し、501万円から700万円の所得層では約3倍の14%ほど「学校での勉強がよくわかる」子どもの割合が高くなっている（ただし、700万円以上ではいえない）。また、学歴別でも中卒の親の「学校での勉強がよくわかる」子どもの割合は3%ほど保護者に学習経験があるほうが学習経験のないほうを上回るだけだが、短大・大卒の親の学習経験のある親の子

では19%も上回っているのである。学校での勉強の中身、そして、「わかる」とは、子どもの家庭ひいては地域での環境・文化と学校環境・学校文化とのズレ等、さらに詳細な調査が必要である。

以上、「本を読むこと」「家で勉強すること」「学校での勉強がわかること」について、所得別・学歴別に親が過去1年間に学習経験があるかないかによって子どもの行動を見てきた。その結果、親の学習活動が、いかにその子どもの行動に与える影響が大きいか明らかになった。親は「勉強しろ」と言葉でいうよりも、まさに「親の背中を見て子どもは育つ」ことが、親の学習活動とその子どもの行動を詳細に検討する事により再確認されたといえる。

ただし、ここで示したのは「すこしでも」本を読んだり、勉強をしたりする子どもの割合に親の学習活動がどう影響するかである。より細かく「本を読む」時間や「家で勉強する」時間に関して分析してみると、図示はしていないが、1時間以上本を読んだり、1時間以上家で勉強したりする子どもの場合には、親の学習活動の有無は子どもの場合には、子どもの行動にほとんど影響を及ぼしていない。もう少し付け加えると、親の属性である所得別や学歴別に見ても、そのように長時

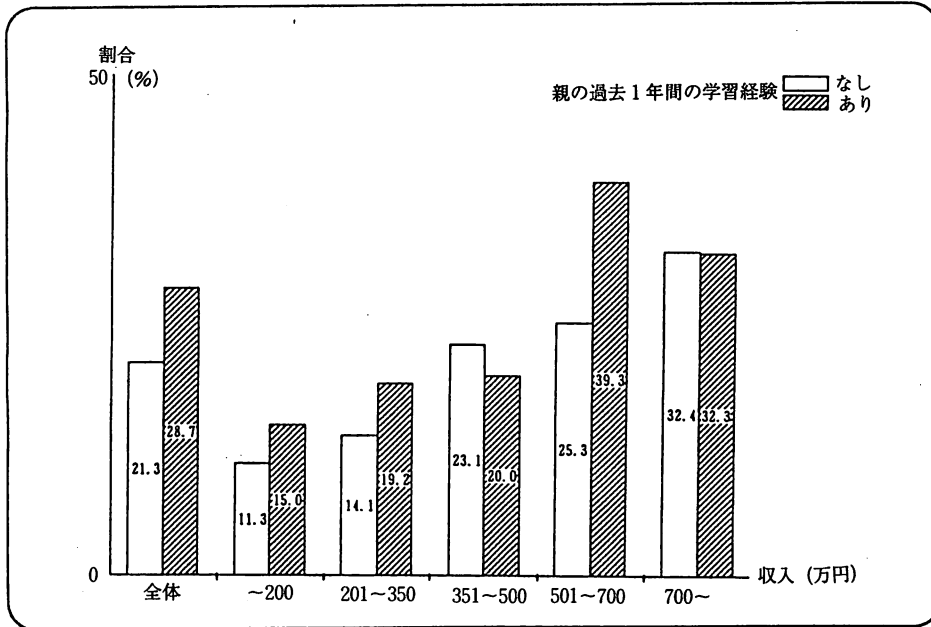


図7 親の過去1年間学習経験の有無による、
学校での勉強がよくわかる割合（所得別）

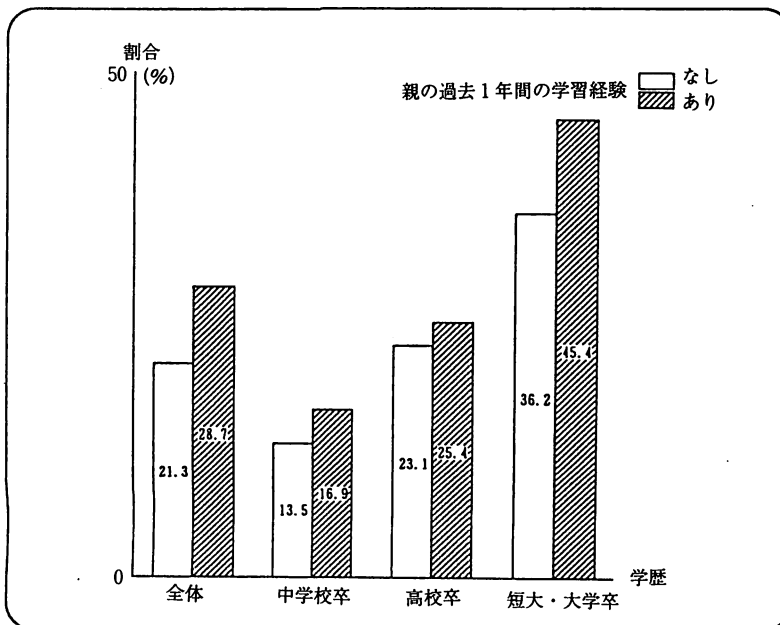


図8 親の過去1年間学習経験の有無による、
学校での勉強がよくわかる割合（学歴別）

間にわたって読書活動や学習活動を行っている子どもの場合、その子どもの行動の割合では所得・学歴では差がないのであり、その要因の分析が次回に待たれる。推測ではあるが、親の学習活動は、きっかけ、あるいは動機付け、さらにいうとっ

かかりの意欲しかもたらないということである。しかしながら、このきっかけづくり、興味を持つ感性・意欲・態度というのが、現代社会の中で青少年にまさに求められているものと思われる。

註

- 1) 小学校4年生から中学校3年生までの青少年およびその親に対する調査票は、それぞれ学校を通じて配布し、自宅で回答してもらい、再び学校を通じて回収した。その際、回答者のプライバシーを守り、かつ率直に回答してもらうために、回答済みの調査票はそれぞれ封筒に入れて密封し、個々の児童・生徒と親の調査票がセットになるように回収した（即ち、それぞれ密封した子と親の調査票を、さらにセットにして別の大きな封筒に入れて密封し、提出してもらった）。できるだけ片寄りの無いサンプルを抽出するためには、調査票の配布・回収の拠点となる学校と数をできるだけ多くする必要がある。尼崎市には45の小学校と22の中学校がある。そこで、これらすべての小・中学校を調査の拠点とすることとした。そして小学校では1校につき1クラス、中学校では1から2クラスを抽出して、調査票を配布し回収した。その結果、調査票の有効回収率は小学校で96%、中学校で95%の高率に達した（配布した調査票の数は、生徒用と保護者用を1セットにした場合、小学校で1554セット、中学校で1354セットであり、有効回収数は、小学校で1491セット、中学校では1286セットであった）。

2) 表2 親への学習経験質問票

[27] これまで、あなたは次にあげたような方法で学んだことがありますか。
あるものすべてに○をつけ、[] 内に学習の内容を書いてください。

- | | |
|---|-----|
| 1. 身近なひと（家族・友人・近所のひとなど）におしえてもらった … | [] |
| 2. 先生やお師匠さんから個人教授を受けた …………… | [] |
| 3. 地域や職場のサークルで自分達で学んだ …………… | [] |
| 4. 通信教育を受けた …………… | [] |
| 5. ラジオやテレビを利用して学んだ …………… | [] |
| 6. 本や雑誌などで自分で学んだ …………… | [] |
| 7. 育友会や婦人会などの教室や講座にかよった …………… | [] |
| 8. 公民館・勤労婦人センター・技能研修センター・総合文化センター
など市の施設での講座や教室にかよった …………… | [] |
| 9. 大学の公開講座にかよった …………… | [] |
| 10. 新聞社・デパート・ホテルなどの文化教室や講座にかよった …………… | [] |
| 11. 専修学校や各種学校（経理学校・料理学校など）にかよった …………… | [] |
| 12. つとめ先での研修や訓練を受けた …………… | [] |
| 13. その他 → 具体的に書いてください | [] |

()

上にあげた学習のうち、過去1年間に学んだものがありますか。
あればその番号を次に書いてください。 →

()